



# がく し 学 而

撰南大学図書館報

No.90 2009.4

▲ティセラ／オルテリウス  
日本島図

スペイン黄金世紀文学稀観本  
コレクション▶



## 〈 CONTENTS 〉

歴史のなかの読書 ―グリム童話と近代家族の誕生―	図書館紹介 寝屋川本館	11
撰南大学図書館長 三成美保	枚方分館	12
大学の風景 ―グローバル化とともに―	図書館員の声	13
経営情報学部 准教授 藤井一弘	学生の声	14
英語多読のすすめ	撰大図書館フォーラム文化講演会	
外国語学部 講師 松田早恵	図書館文化大賞/マスコット・キャラクター入賞者発表	
図書館利用統計と活動状況	編集後記	16



巻頭言



グリム童話第3版(1837年)の挿絵。グリム兄弟の末弟ルートヴィヒ・エミールが描いた。「メルヘンおばさん」ことドロテア・フィーメンニンは、フランスでナント勅令が廃止され(1685年)、ドイツに移り住んだユグノーの子孫である。

# 歴史のなかの読書 — グリム童話と近代家族の誕生 —

摂南大学図書館長 三成 美保

歴史とともに読書は変わる。「精読」から「多読」へ——ヨーロッパで近代的な読書行動があらわれたのは18世紀後半、啓蒙後期のことである。人びとは私的に読書を組織化した。読書協会や貸本屋が登場する。19世紀になると、国民の教育水準をあげるため公共図書館が誕生した。廉価版も生まれ、読書は家庭でもまた楽しめるようになる。読書と討論が「公論(世論)」を生み出していったのである。

「自由と平等」が保障されたはずの近代市民社会。だが、「自由と平等」が女性にまで及ぶのはごく最近のことにすぎない。読書は久しく「公」的なものと「私」的なものに分けられた。新聞や論説雑誌、哲学や政治の書籍を読んで討論を伴うのが「公」的読書である。三月前期(ビーダーマイヤー期)のドイツでは、読書クラブに集った男性たちが熱心に本や新聞を読み、政治と経済の動向について議論した。飲み物を運ぶ女中のほかに女性はいない(図1)。



図1：読書クラブ(L.アルト, 1840年頃)

「公」的読書は男性のものであった。女性の読書はあくまで家庭での「私」的な愉しみとされ、小説や道徳週刊誌が流行した。書き手としても女性は縛られる。女性が書くのは手紙などの非職業的な文章に限られた。ゲーテもまた妹コルネリアが読書を好み、高い教養を身につけていることをたしなめている。こうした流れに抵抗した女性もいる。そのなかの一人ゾフィーは離婚後、物語や詩を書いて生活費を稼いだ。しかし、ブレンターノと再婚したのち、妻としての役割が彼女の文筆活動を停滞させてしまう。ブレンターノは、若きグリム兄弟にメルヘン蒐集を勧めた人物であり、グリム童話の献辞を受けた女性の兄である。

グリム童話の初版は1812年。ナポレオン率いるフランス軍からの解放運動がドイツ各地で盛り上がる時期にあたる。グリム兄弟によるメルヘン(民話)の蒐集もまたドイツの「自然」で素朴な民族的遺産を再評価しようとの運動の所産であった。グリム童話は、ナショナリズムとロマン主義を体現している。しかし、グリム童話の名宛人は男性ではない。『子どもと家庭のメルヘン集』というタイトル通り、グリム童話は家庭で過ごす女性と子どもに捧げられた。

初版以降、1857年の第7版(決定版)までグリム童話は増補改訂を繰り返す。それらには200ほどのメルヘンが収められた。しかし、とくに普及したのは1825年に出された選集である。50話を収録し、1858年までに10版を重ねた。グリム童話のなかで女性が主人公となるメルヘンはおよそ3分の1であるが、選集版ではそれが6割にも達する。人気作はこれらに多い。



グリム童話では、男性主人公はしばしば無能な怠け者である。これに対し、女性主人公は親孝行で従順な働き者として描かれる。けなげに生きる美女が王子に見初められ、結婚というハッピーエンドを迎える。他方、いじわるな継母をはじめ、高慢で自己主張が強い女性は厳しい罰を受ける。

人気メルヘンのモチーフとなっているロマンチックな「愛」の賛美は、ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』(1774年)によって定式化された。フィヒテに至って、それは哲学になり、法原理となる。「男性には根源的には愛はなく、性衝動があるだけである。…あらゆる自然衝動のうちで最も高貴な愛という衝動は、女性にだけ生得的である」(『自然法論』1796年)。彼にとって、「愛」を本性とする女性の本来の居場所は「家庭」であり、その「愛」はなによりも夫と子に対して向けられるべきであった。

ここでの「愛」は対等なパートナーシップではない。「シンデレラ(灰かぶり)」、「白雪姫」、「眠れる森の美女(いばら姫)」のいずれにおいても「待つ」だけというヒロインの受動性がきわだつ。ヒロインが愛されるのはその美しさゆえである。王子については、美醜も性格もほとんどわからない。政治的・経済的実力が王子という肩書きから推察されるにすぎない。

近代ドイツの新しいエリート層——「財産と教養」をもつ市民(教養市民)は、新しい家族観をもっていた。これが「近代家族」である。中央には父、床には少年が座る。2人の女性は子の母と叔母であろう。3人のまなざしは子どもに注がれている。そばには大きな暖炉と犬。家父長制的であるが、子どもを慈しむ家族の姿がそこにある(図2)。やすらぎとくつろぎの場としての「家庭」が登場したのである。夜ともなれば、父は書齋で専門書を読み、母は子ども部屋で眠りにつくわが子にメルヘンを読み聞かせることであろう。グリム童話は専業主婦をもつ市民家族のための物語であった。

メルヘン集としてはすでに、イタリアのバジレ版とフランスのペロー版が知られていた。これらに編者の意図を感じた兄ヤーコブは、幾人かの「メルヘンおばさん」から聞き取ったメルヘンをでき



図2：家族像 (G. アダム, 1830年以前)

るだけ忠実に再現しようとした。しかし、子どもへの教育効果を期待する以上、物語は教訓と幸福に満ちたものでなければならない。ヤーコブが採用した初版の残酷な場面は、弟ヴィルヘルムによって第2版以降改められていく。性描写を省くなど、敬虔なキリスト教徒としての立場からも改訂が加えられた。

たとえば、「白雪姫」では、子の虐待者は実母(初版)から継母(第2版以降)に変わる。継母が犯したのは殺人未遂という犯罪にとどまらない。版を重ねるごとに、「高慢・嫉妬・憎悪」というキリスト教上の「罪」が強調されていく。「眠れる森の美女」の場合、バジレ版では未婚の出産や重婚といった性的逸脱が認められるが、グリム版ではそうした叙述はない。姫はあくまで清純無垢に描かれる。姫と王子の盛大な結婚式がハッピーエンドとなる点は、「シンデレラ」や「白雪姫」と共通する。結婚こそが女性の幸せであるというメッセージが込められている。

インターネット時代の読書にもはや性別はない。公私の区別も曖昧になった。しかし、それは「私」の安易な暴露という新たな危険と隣り合わせでもある。ネット上で手軽に得られる情報は匿名性が強く、根拠薄弱なものも少なくない。個人の責任で情報を選別しなければならない時代が訪れたと言えよう。選別能力は読書によって培われた教養が決める。図書館にある古今東西の書物をそれぞれの歴史にも思いを馳せて手にとってほしい。

# 大学の風景

## — グローバリゼーションとともに —

経営情報学部 准教授 藤井 一弘

昨秋、白日の下になった金融危機以降、世界は同時不況の様相をますます強めつつある。この状態を理解しようと過去へと遡ると、偶然ではあるが、それが自分自身の職業生活の時間とほぼ重なることに気付かされる。

この職業に入ったのは、1987年の春、任地の北陸の町では大した実感はなかったが、日本がバブル景気に沸いていた時である。日本海の対岸、ソビエト連邦のゴルバチョフによるペレストロイカの帰趨が大きな関心を持たれていた頃でもあった。しかし、事態はことのほか急速に進行し、その2年後の秋にはベルリンの壁が崩壊。その年のクリスマスのベルリンでは、当時、存命であったバーンスタインの指揮で、ベートーヴェンの「第九」が演奏された。そのオーケストラは、当時、西独のバイエルン放送響に加えて、ベルリンの分割管理の当事国であった米英仏/ソ、そして東独各国の代表的オーケストラのピックアップ・メンバーからなる特別に編成されたものだった。

その翌年には両ドイツの再統一、そして、また、その1年後にはソビエト連邦自体の解体というように、雪崩を打って時代は移り変わっていった。東西冷戦は終結し、自由主義の勝利が声高らかに語られた。バーンスタインによる「第九」が、第4楽章の Freude（歓喜）を Freiheit（自由）へと歌詞の一部を変更して唱われたのは、象徴的である。

しかし、自由の勝利は冷戦終結の一面でしかなかった。当然、それは、市場経済の勝利でもあったのである。その10年ほど前から改革開放路線

へと舵を切っていた中国に加えて、旧ソ連と中東欧諸国、あわせてほぼ16億人の市場を伴って、グローバル化の幕が切って落とされたのである。

新たな市場は、東西冷戦時代に資本主義圏の中で、とりあえずは、それぞれのポジションを落ち着かせていた西側先進諸国の巨大企業にとっては、新たな利潤獲得機会の沃野というにはとどまらなかった。新市場の分割競争において破れることは、それまでに築き上げた地位を一挙に失うことを意味するからである。これは、一旦出来上がった列強による世界の勢力図が大戦によって塗り替えられる、という構図と同じである。

その結果、巨大企業間の合併、買収、そして資本提携が相次ぐことになった。鉄鋼や化学といった重厚長大型産業のみならず、電子部品やデジタル家電、そして自動車産業といった多くの製造業で、膨らんだ資産を背景に巨額な資金を手に入れ、大規模な設備投資を行うことで、規模の経済と経験曲線効果を通じてコスト・リーダーシップを獲得し、殲滅戦に勝ち抜くという戦略が選ばれた。「選択と集中」と言えば、何かスリムになったかのように聞こえるが、限定した分野で巨大化に突き進むということだったのである。

熾烈なコスト競争を伴うこのような戦略では、当然、自国よりも海外の方が労働コストが低い場合、後者での生産が選ばれることになる。海外生産による自国労働者の失業か、それとも自国の労働力と海外の労働力との価格競争か、という二者択一が迫られた。

このことによって、日本の仕事の現場の風景は

大きく変わっていった。東西の壁がなくなったことで、さらに供給圧力が増したグローバル化した労働市場は、とりわけ日本の非熟練労働力と低賃金の海外の労働力が、競合するという事態を出現させた。移民や出稼ぎという形で物理的にヒトが移動しなくとも、すでに、ある種の労働に関して世界に横断的市場が成立している。これもヒトのグローバル化の重要な側面である。

これまで述べたような傾向は、冷戦の終結による世界資本主義化という要因だけでなく、日本の約3倍に達する国内総生産のほぼ7割が個人消費によるという、米国の過剰消費を当て込んだ「旧市場」での激しい競争によって、さらに強化されてきた。過剰な消費は、当然、家計や政府部門、そして貿易取引における巨額の赤字と表裏一体であり、それらを埋め合わせるため、とりわけ、海外からの資金環流のためにも、巧緻で魅力的な——と思い込ませる——金融取引の仕組みをはじめとして、さまざまな信用創造のメカニズムが用意された。

現在、眼前に展開されているのは、この瓦解のプロセスである。金融経済の破綻が実体経済に及んだと言われる——どうも実体経済は、real economyの訳らしいが、では、それに対峙するモノとしての金融経済はvirtual（虚構）なのか、と余計な突っ込みを入れたい。ただし、virtualというのも、もともとは「事実上の」という意味なのだから話はややこしい——が、グローバリゼーション（世界資本主義化・市場経済化）において、二者はむしろ一体であり、相即的に膨張し、かつ強度を増してきたと言いきらう。

では、この20年間、日本の「大学」は、どのようにその姿を変えてきたのだろうか。私には、「相携えて」進んできたと見えるのである。

何よりも目につくのは、大学、そしてそこでの教育と研究——大学に限らないが——について語るときの言葉が、経済、なにかんづく企業についてそうするときの言葉と、ほとんど違いがなくなってきた、ということである。

いろいろな見解があるだろうが、言葉は思考を表し、思考は言葉によって制約される。思考と行為の二分法が「近代の行き詰まり」を生んだと指摘されて久しいが、ともかく行為と言葉が、相互に照らし合う関係にある、ということは言える。そうすると、大学の姿も、ここでややバランスを欠いて長々と述べたグローバリゼーションの姿、そしてその「病理」の相似形として、今現在あるのではないか、という疑問が十分に成立する。

曰く、収縮する18歳人口をめぐっての大学間競争、それに勝ち抜くための初等・中等教育段階からの囲い込み、そして大学同士の系列化や合併、大規模大学の寡占化、競争的資金の獲得、学生に高い付加価値を与えて卒業させること、卒業にあたっての品質保証、思いつくだけでも枚挙にいとまがない。

大学、そしてそこでの教育や研究が、経済から隔離されたシステムであると言っているわけではない。しかし、社会システムについての一般的な考え方からすれば、全体社会というシステムを成り立たせている部分システムとして、各々のシステムがそれ自体の言葉を持ってこそ、言い替えればユニークな作動原理を有してこそ、社会全体の存立も保障されるはずである。

生態系において種の多様性の保持が求められるのは、それぞれの種がそれ自体として大切だから、というだけからではない。大きな環境の変化があっても、それに対して生態系がその全体として適応できる可能性が高まるということからも、種の多様性の保持が必須のものとされるのである。

社会の中で、経済の言葉で語られるシステムのみが肥大化していくことは、当該システムの存続の可能性を奪うことにもつながっていく。経済システムも、他の部分システムからの問いかけに応じてこそ、当該システムを新たに展開させることができるのである。教育や研究のシステムが、経済システムに問いかけるシステムでなくて良いはずはない。現在こそ、それ独自の新たなる言葉が、これまで以上に希求されるべき「時」のはずである。



# 英語多読のすすめ

外国語学部 講師 松田 早恵



## 食わず嫌い?の英語多読

巷では活字離れが叫ばれているが、英語（教育）の観点から言っても、「英語の本など読んだことが無い」人が多いのが現状である。中学・高校6年間で読む教科書の英語は大体3万語程度だと言われていて、大学に入っても英語専攻以外の学生はせいぜい週に2こまの英語の授業があるのみで、絶対的な英語のインプット量が足りない。外国語学部英語コースの学生はさすがに英語の授業数が多いが、それでも十分な英語に触れているかと言われると非常に疑わしい。それでは、英語のインプット量を増やすにはどうすれば良いのか。答えはズバリ、英語での多読である。

## 多読の効果

多読では、言語にではなく内容に注意が向けられる。辞書は原則として使わず、自分の能力範囲内の読みたいものをできるだけ多く読み、面白くなければ途中で止めてもよい。文中の語彙や文法を辞書で調べながら精読するのではなく、ある程度のスピードで大量の文章を読み、内容を楽しむのである。その結果として、語彙や文法に関する知識を深め、背景知識を身につけることができる。辞書無しで読んで語彙・文法力を上げることはできないという論（cf. 白畑, 須田, 若林, 2004）がある一方で、多くの研究結果が多読の効用を示唆している。主なものとしては、多読によるリーディング能力の向上（cf. Hafiz & Tudor, 1989; Elley, 1991; Krashen, 1993; Lai, 1993; Lao & Krashen,

2000; Rodrigo, Krashen, & Gribbons, 2004) が挙げられるが、他にもライティング能力の向上 (cf. Hafiz & Tudor, 1989; Janopoulos, 1986; Lai, 1993)、語彙力の向上 (cf. Pitts, White, Krashen, 1989; Horst, Cobb, & Maera, 1998; Lao & Krashen, 2000; Horst, 2005)、リスニング力やスピーキング力の向上 (cf. Hafiz & Tudor, 1989; Cho & Krashen, 1994)、学習意欲の向上 (cf. Elley, 1991; Cho & Krashen, 1994) などが報告されている。

### 多読の効用具体例

では、多読の良さをいくつか、絵本や児童書の具体例と共に紹介したいと思う。

#### ①絵本から英語の多義性を学ぶ

Peggy Parish 著 *Amelia Bedelia* シリーズは英語の多義性を学ぶのに最適である。Amelia はお手伝いさんとして Rogers 夫妻の家にやってくるが、言いつけをことごとく勘違いして大変なことになってしまう。例えば、“**Dress** the chicken.”と言われたので、チキンに服を着せるのだが、ここでの dress の意味は「下ごしらえする」ことである。総語数 1,000 語ほどの短いストーリーだが、10 種類以上の多義語が学べてしまう。楽しい絵が、状況の理解と語彙の定着をさらに促しもする。

#### ②児童書から文法を学ぶ

Roald Dahl 著 *Charlie and the Chocolate Factory* (総語数 29,743 語) には様々な構文 (文法項目) が出てくるが、中でも際立って多いのが最上級を意味する表現である。“It was **the largest and most famous** in the whole world!” や “Mr. Willy Wonka is **the most amazing, the most**

**fantastic, the most extraordinary** chocolate maker the world has ever seen!” などがそうである。文法書で最上級の作り方を「the + 形容詞・副詞の原形 + (e)st 又は the + most + 形容詞・副詞の原形」と覚えるよりも、具体的な文脈の中で様々な最上級表現に触れる方が適切な言い回しを内在化できる。また、比較級で最上級の意味を表す “...far **sweeter** and **creamier** and **more delicious** than anything the other chocolate factories can make!” などの表現にも触れられる。これ一冊で、中高 6 年間のインプットと同じ量の英語を読むことにもなる。

#### ③絵本から文化を学ぶ

学生に人気の *David* シリーズは、洗剤の CM で御馴染みのキャラクターが主人公である。*David Gets in Trouble* では、David が何故怒られているのかは記されていないのだが、彼の言い訳から状況を想像することができる。その中に、David が石鹸をくわえさせられている場面がある。彼はすねたように、“But Dad says it.” (そやけど、お父さんかて言うやん) と言うのだが、汚い言葉を使ったので (口を綺麗にするために) 石鹸を入れられたという訳である。普通は “Wash your mouth out with soap.” と言っても「そんな言葉を使ってはいけません」くらいの意味だが、私の知り合い (米国人) に本当に (子どもの頃) 口を石鹸で洗われた人がいるので、まんざら警告だけでもないらしい。

#### ④絵本で ESP を学ぶ

ESP というのは、English for Special Purposes の略である。分野を特化した英語とも言えるだろう

うか。最近では薬学部、工学部、法学部向け英語教材も開発されてきているが、是非お薦めしたいのがサイエンス絵本の *Magic School Bus* シリーズである。これは、英語圏の小学生が愛読しているものであるが、特定分野の語彙強化に大変効果的である。バスが体内に入って探検する *Inside the Human Body* では、blood vessel, molecule, germ などの単語が出てくるし、電界へ行く *The Electric Field Trip* の話では、transform, electromagnet, phosphor などの語が絵と共に学べる。

他にも、イディオム・俗語やコロケーション（語と語の組み合わせ）を文脈の中で学ぶことができるし、辞書を使わずに読むことで、未知語を類推する力がつくなどの効果もある。また、ノンフィクションを読むことで、世界の実情を知ることができる。このように本を通して英語の感性を磨けば、結果として TOEIC など資格試験のスコアアップにも繋がる。また、日本語の本も読むようになったという相乗効果も報告されている。

## リーディングラウンジ開設

この度、寝屋川キャンパス図書館3階には、多読用書籍（英語、中国語、スペイン語、インドネシア・マレー語）を並べた「リーディングラウンジ」が開設された。英語のコーナーには、絵本、マンガ、児童文学、ヤングアダルト小説、日本文学の英訳、一般書などがいろいろ揃っているので、是非多くの方に手に取って見ていただきたいと思う。



※紙面の関係上、参考文献は載せませんが、ご興味があれば松田までお知らせください。





# 図書館利用統計と活動状況

図書館では学生の皆さんの図書館利用状況について調査し、よりよい図書館運営を行うための参考としています。ここでは2007年度の調査結果をご紹介しますとともに、昨年度の図書館の取り組みや今後の予定について報告します。

区 分		本 館	分 館	計
開館日数	2007年度	268日	281日	—
	2006年度	266日	282日	—
入館者数	2007年度	188458人	192146人	380604人
	2006年度	182340人	159889人	342229人
1日あたりの 平均入館者数	2007年度	703人	683人	1386人
	2006年度	685人	566人	1251人
貸出者数	2007年度	14180人	4395人	18575人
	2006年度	14568人	4561人	19129人
貸出冊数	2007年度	28445冊	8451冊	36896冊
	2006年度	27908冊	8323冊	36231冊

表-1：入館者数・貸出冊数

## 1. 利用状況について

2007年度の入館者数などの状況は表-1の通りです。入館者数・貸出冊数ともに減少しています。それは書籍を使わず、インターネットなどの外部データベースを利用した情報収集への移行が一因として考えられます。事実、1階の情報検索コーナーは常に盛況を呈しています。

貸出冊数は、増加傾向にある院生に比べて、学部生は法学部を除く学部で減少傾向にあります。(次頁 図-1・図-2を参照)

原因はやはり前述のとおり、学生の活字離れにあると思われます。一方、学外からの利用者に目を向けてみますと、市民・卒業生の利用が増加しており、本図書館が地域に開かれた生涯学習の場として利用されていることが確認されます。

こうした状況をふまえ、図書館では来館動員を促すため、魅力的な大学らしい選書を一層すすめ、より充実した資料収集を図っていきます。

## 2. 2007年度図書館の活動について

2007年度にリプレイスした新図書館システムは、学生が自分で図書の予約や貸出更新ができるMy Libraryのシステムや、蔵書検索システムOPACで図書資料の目次・あらすじが参照できる機能を付加しました。これによって図書館に向かずとも本の予約や返却日の確認ができるようになり、学生の利便性を高めました。また、図書を探す場合に目次やあらすじで、自分の求める図書であるか否かを確認でき、効率的な文献検索が可能となりました。

図-1：学部生貸出冊数

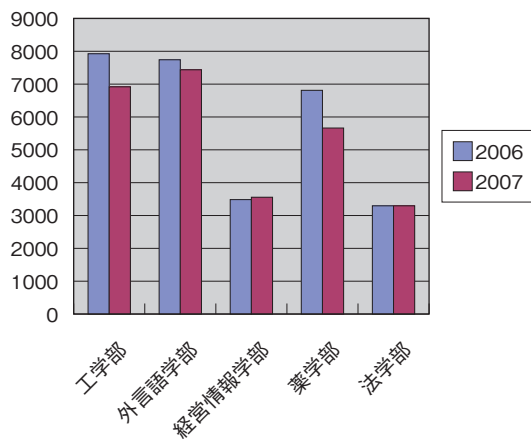
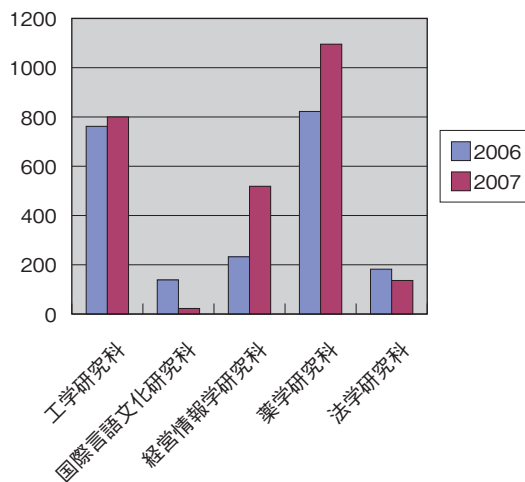


図-2：院生貸出冊数



図書館独自の文化発信としては、『書評大賞』の開催により学生の読書活動の促進を図っております。また、10月・11月の2度にわたる文化講演会を開催しました。さらに、定期的にプチアートルで映画上映会を行い、図書館員推薦の映画を上映するなど、いろいろな角度から学生の図書館利用促進を行いました。

### 3. 2008年度図書館活動概況

学習環境の整備として、多数のコーナー設置、蔵書構築を行いました。例えば、1階フロアは、学生が利用しやすい空間に全面リニューアルし、従来2階に配置していた『新書コーナー』、『文庫本コーナー』を1階に移し、他に新しいコーナー『ブックレット選書コーナー』『テーマ展示コーナー』を設置し学習の入門書が備わったフロアを目指しています。

2階フロアは、新しく『プライマリーコーナー』『学際コーナー』を設置しました。また、1階に設置されていた『入門書コーナー』を移動させ、同時に『シラバスコーナー』を置き、シラバスに掲載されている教科書・参考書を揃えました。そして、3階フロアでは、『リーディングラウンジ』

(8ページ参照)を設置し、学生の語学力向上に向けた取り組みを開始しております。

さらに、学生参加型図書館を目指し、2008年度秋より、学生のライブラリーサポーターを募集し、学生の目線で図書館のあり方を提案していただく試みを行っています。

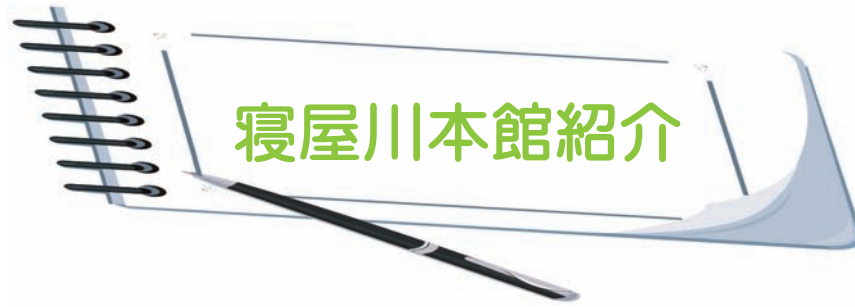
また、2007年度までの『書評大賞』を発展させ、書評にとどまらない、学生の多様な表現作品を募集した『撰大文化大賞』を企画するとともに、図書館を身近に感じてもらうため、図書館マスコットキャラクターの募集も行いました。

以上の効果もあり、2008年度は、1ヵ月の入館者数が平均2万人を超え(2008年11月現在)、昨年に比べ5000人近く増加しました。

### 4. 2009年度の予定について

2009年度に向けては、2008年度に開始した各企画をより一層充実させるとともに、学生が1冊でも多くの図書を手に取れるような選書・レイアウトなどを行っていく予定です。また、図書館利用オリエンテーションや各種データベース活用法などのガイダンスを充実させ、学生が利用・相談しやすい図書館づくりを行ってまいります。





本館は 2008 年 4 月より、みなさんが親しみやすく、使いやすい図書館をめざし、色々なことを行っています。

### 〈1F マルチメディアフロアのレイアウト変更〉



棚や机等の移動を大幅におこない、また資料形態ごとにまとまりのある配置をめざしました。また、新着コーナーやブックレットコーナー、テーマ展示コーナー等、新しいコーナーも設置し、従来 2 階にあった、文庫、新書コーナーを 1 階に移動し、みなさんの学習の入門書となるような図書を集めました。



### 〈ニュースレターの発行〉

毎月、みなさんにお伝えしたい図書館の情報などを学生有志と共に編集し発行しています。

特に週 1 回程度、16:30 から 3 階プチシアトル（図書館ホール）にて行われている映画会情報は必見です！

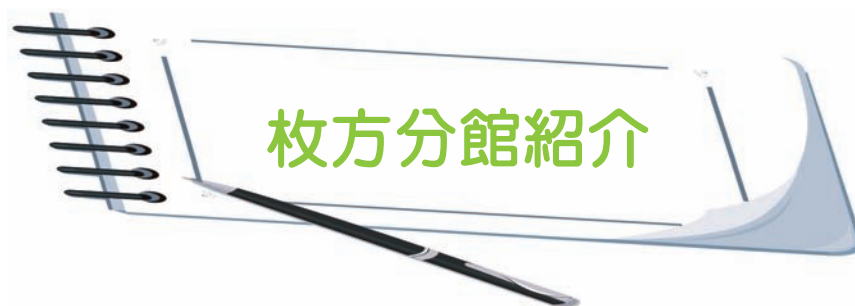
毎月、テーマを決めて上映しています！



グループで映画鑑賞が可能に

3 階の第 2 閲覧室で、2 人以上のグループであれば、映画鑑賞が可能になりました。

受付は 1 階カウンターで行っています。是非、ご利用ください。（詳細はカウンターまで）



枚方分館は薬学部2号館2階にあります。

薬学関係の専門雑誌をそろえた学術雑誌室、専門書・教養書が並ぶ普通図書コーナー・参考図書コーナーと自習に専念できる閲覧室がワンフロアーに集約されています。

### 〈データベース講習会開催〉



さる11月17日(月)に翌年度の大学院生と教職員を対象に社団法人化学情報協会から講師をお招きして「SciFinder Scholar(サイファインダー・スカラー)講習会」を実施いたしました。SciFinder Scholarは生化学、化学、科学、工学、医学、薬学およびその他の関連情報の科学者が作成する世界最大のデータベースです。

参加者は講師の方の話に熱心に耳を傾けられていました。

### 〈展示コーナーより〉

今年度、図書館枚方分館に学生から寄せられた「文庫を増やして欲しい」との要望に応え、新刊文庫・新書の展示を行っています。

コンパクトで持ち運びしやすいサイズの為、通学・通勤途中にも読みやすいと好評です。



図書館は皆さんの為の情報発信基地です。

わからないことは、カウンターに相談して有意義な学生生活を送ってください。



# 図書館員の声

「本が読みたい。でも、どんな本があるのかわからない。」  
そんなときには、ぜひ

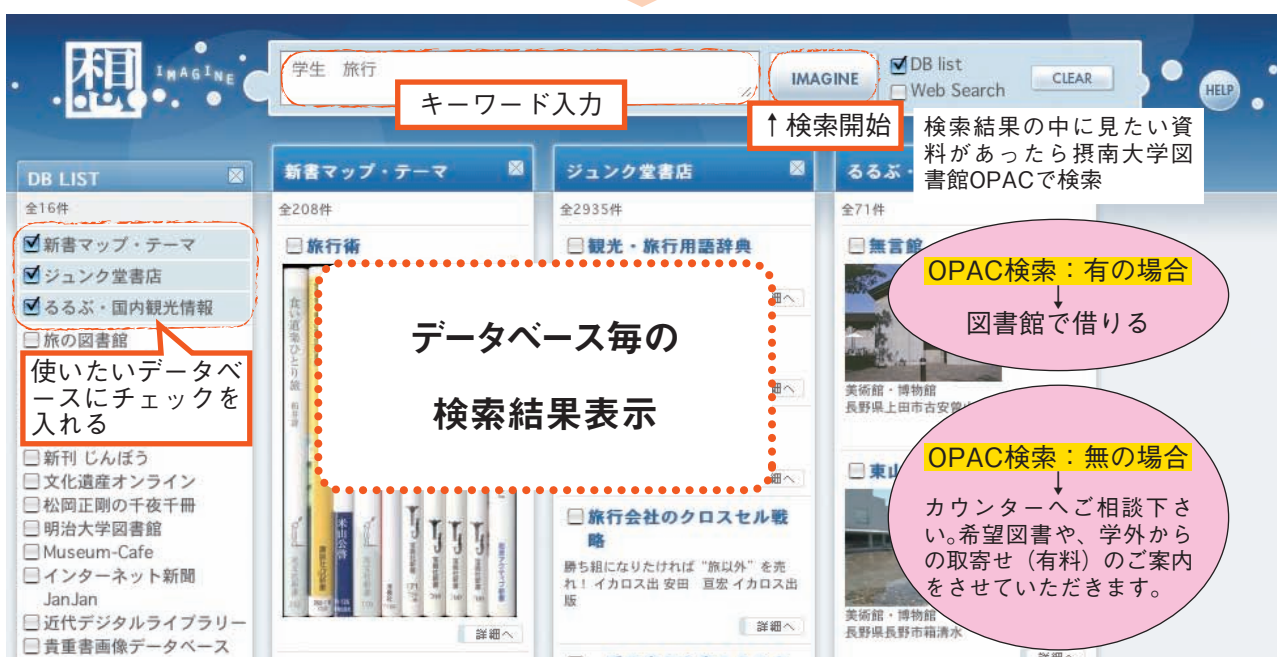
「想」 <http://imagine.bookmap.info/index.jsp>

で、検索することを、オススメします。

図書はもちろん、新聞記事、雑誌といった図書以外の資料も書店、Webcat Plus、施設情報など様々な分野のデータベースから検索することができます。



例えば、「学生」と「旅行」に関する図書を探したい。ついでに旅行場所も…という場合には。画面に表示されているデータベースから目的にあったページを選び出し、**チェック**をいれます。次に、調べたい事柄の**キーワード**を入力し検索ボタンをクリックします。検索結果の中に見たい資料があったら、**摂南大学図書館のOPAC(蔵書検索システム)**で検索してみてください(OPACとリンクはしていませんので大学のホームページから図書館のページを検索してください)。



# 学生の声

図書館では、様々な情報の発信活動も行っています。その一環として2008年11月22日(土)に、**摂大図書館文化フォーラム・学生シンポジウム**が催されました。その内容を紹介します。



みなさんこんにちは、学生シンポジウム委員会です。今回、私たちがシンポジウムの題材として選んだのは「大学講義」です。大学生活の中で、一番身近で、一番重要と言える授業。その授業運営に対して、学生が求める授業像と、教員が行う授業に「溝」があるのではないかと考え、「ここがヘンだよ！大学講義」というタイトルで、全学部（薬学部除く）・学年にアンケートを実施・集計・分析し、学生の求める授業像を明らかにしていくことをねらいとしました。このシンポジウムの構成メンバー6人は全員、教職課程を履修している3回生です。将来、教壇に立って授業を構成する立場の私たちは、教職の専門的な講義や、模擬授業などを通して、「より良い授業のあり方」について、専門的な視野を持つようとしています。そういった学生を軸として、摂南大学の授業を分析し、より良い授業のあり方を学生目線で提言し、授業改善への一助となることを、私たちの願いです。

まず、大学講義を分析する視点として、大学教

員の資質向上を目指す学内組織「FD委員会（以下FDとする）」と「学生の視点」の2つを設け、FDの発行する「FDニュース」と私たちの作成した「学生アンケート」をもとに、分析を行いました。その中でも注目すべきなのは、「出席率の良い学生は教員に対する評価も低い」という結果に対する、FD側と学生側の見解の違いです。FD側は「授業に出ていないのだからまともな評価ではない」というのに対し、学生側は「教員評価が低いから、出席率が低い」という見解の差がありました。この見解の違いに対し、学生アンケートを実施したところ、「出席しなくてもいいのであれば、教員評価の低い授業には出席したくない」という傾向が見られました。

次に、学生アンケートの結果ですが、私たちが一番に重要視したところは、「授業選択の基準」です。学生が授業を選ぶ基準は「単位の取りやすさ」なのか「授業内容の良さ」なのか。では、「学生の考える『良い』授業」とは、どんな授業なの



か。逆に、「学生の考える『良くない・悪い』授業」とはどういったものか、その基準を明確にしたいと考えました。

学生の傾向として、授業を選択するうえで一番重視しているのは、単位のとりやすさよりも、授業内容の良さでした（全体の76%の学生が重視）。2番目に、学生が重視しているのは、授業内容の良さよりも単位のとりやすさを重視する学生が55%、しかし、単位が取りにくくても内容が良い授業を受けたいという学生が、意外にも37%いました。この結果は重要で、全体の4割近くの学生は、単位取得が難しくても、質のいい授業を求めているということがわかります。そして、この結果に関しては、学部ごとの顕著な差は見られませんでした。

次に、学生の考える「良い授業」「良くない・悪い授業」の基準はどこにあるかということについてです。まず、学生の考える「良い授業」ですが、これについては全学部・学年に共通したものが、「わかりやすい・面白い授業」というのが、全体の半数近くに昇りました。では、学生にとって「良くない・悪い」授業とは何か。それは、「教員が一方的に話す」「独りよがり」形式の授業です。こういった授業が、多くの学生にとって「良くない」と位置づけられています。ハイレベルな内容を教授することが良い授業なのではなく、ハイレベルな内容でも、＜学生に理解できる程度に噛み

砕いて伝える＞ということが、学生が望んでいる「良い授業」なのです。授業内容についても、教員にとっては基礎的な内容でも、学生から見ればハイレベルな内容になっていることがあります。学生の能力を把握し、それに即して授業を組み立てることが必要とされています。ハイレベルな内容をそのまま教授しても、結局は教員だけが空回りするに終わり、内容が学生の中に残らず、意味のないものになってしまうのです。こういった状況は、教員一人で授業をしていると気づきにくいと思われま。しかし、教員間で研究授業を行ったり、FDの実施するアンケート以外に、受講学生の意見を取り入れる機会を設けたり、客観的な意見を多く取り入れることで、改善に向かうと考えられます。実際に、客観的な意見を多く取りいれている教員は評価の高い傾向にありました。

最後に、このような機会を設けてくださった先生方、調査に協力していただいた先生方・学生の皆さんに心より感謝致します。今まで、授業を行うのは教員で、アンケートに答えるのが学生、そしてそのアンケートを集計し分析をするのが教員ということでした。しかし、今回、アンケート作成から実施・分析までの部分を学生が行ったことで、FDの分析には出てこなかった、生の学生の本音を聞くことが出来ました。こういった結果を踏まえ、摂南大学の授業がより良い方向に改善してゆく事を願っています。

### 学生シンポジウム委員会一同

経営情報学部 3 回生

佐野那津美 高砂健人 立石哲也

法学部 3 回生

田中佑一 稲田泰子 杉村まゆみ



# 摂大図書館文化フォーラム文化講演会「大学と学術政策のゆくえ—日独比較」

(2008年11月22日)

文化講演会では、日本学術会議第1部部長をつとめる東京大学教授廣渡清吾氏をお招きし、大学と学術政策の日独比較に関するご講演をいただきました。多数の聴講者との間で活発な質疑応答も行われ、摂南大学の今後の教育課題を考えるにあたり、大いに啓発を受けました。ご講演の概要は以下の通りです。(M. M)

## 【講演概要】

大学のあり方は日独で大きく異なる。それは、「資格社会」と「銘柄（ブランド）社会」の違いと言ってよい。ドイツのワイン法が栽培地域を指定し、格付けを法定しているのに対し、日本の「清酒」は酒税法で定義され、人びとは銘柄で酒を選ぶ。大学も酒と同様である。ドイツの大学は国民が資格をとるための学習の場とされ、大学という制度が「学士力」を保証する。これに比し、日本の大学は大学ごとの品質保証システムをとる。この相

違に従い、両国の学術政策もまた異なる。ドイツは国家予算で大学を運営するが、日本では高等教育費用の私費負担分がヨーロッパに比べて多い。しかし、アメリカは国庫負担と私費負担の双方が多く、高等教育にかかる費用は他国に抜きんでている。昨今のグローバル化のもと、両国の大学はともに変容しつつある。「学士力」の国際的標準化の要請が強まるなか、今後の大学に求められるのは、「世界の公共性」に奉仕できる人材の育成であろう。

## 《 摂大文化大賞/マスコット・キャラクター入賞者発表 》

図書館では、従来、「書評大賞」の対象作品を募集してきましたが、2008年度は、「摂大文化大賞」として多様な表現作品に対象を広げて募集を行いました。さらに、より親しまれる図書館をめざしてマスコット・キャラクターを募りました。以下が、それぞれの審査結果です。

〔 摂大文化大賞 〕		
	テーマ	応募者所属・氏名
人気賞	「誓い」	法学部 北村 隆典
入賞	「初めての撮影」	工学部 越礼 亮太
入賞	「キャンパス・ライフ」	法学部 河野 由佳
〔 摂大図書館マスコット・キャラクター 〕		
	テーマ	応募者所属・氏名
大賞	「LIBRA(リブラ)」	薬学部 堂下 悦子
優秀賞	「とろろん」	工学部 阪倉 泰介
優秀賞	「ビー・メガネ・ケー」	工学部 井上 勝也



## 《 編集後記 》

- ▶ 本文でもお知らせしておりますように、2008年度、図書館では、さまざまなコーナーの新設をはじめとして、より充実した親しまれる図書館をめざして活動を行いました。その一環として、ここ数年、4頁立てで年4回発行となっていました図書館報「学而」を、16頁の「年報」として発行してみました。「『お知らせ』的な図書館報から、多様な思考の『場』としての図書館報へ」というのが、ねらいです（大げさではありますが）。十分に成功したとは言えないかもしれませんが、この在り方への皆様の御意見を伺えれば、さいわいです。(K. F)
- ▶ 表紙写真の撮影は、貴重書庫で行いました。今後も本学所蔵の貴重な資料を「学而」でご紹介できればと思います。編集・校正作業では、多くの方々に協力していただきました。ありがとうございました。(K. S)
- ▶ 本館は今年度、1階フロアのレイアウトを大幅に変更しました。今回は、その話題を掲載しています。この館報を読まれて図書館により興味を持っていただけたら嬉しいです。今号の編集にご協力くださいました皆様方に厚くお礼申し上げます。(A. H)



「学而」摂南大学図書館報 NO.90 2009.4 編集・発行 摂南大学図書館  
 本館 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17番8号 TEL:(072)839-9111  
 枚方分館 〒573-0101 大阪府枚方市長尾峠町45-1 TEL:(072)866-3102  
 URL : http://www.setsunan.ac.jp